多文化間コミュニケーションにおける方略的な言語行動の研究
――初対面接触場面における日本人学生と留学生の丁寧体使用――

北　村　孝一郎*

A Study on Strategic Language Use in Multicultural Communication: The Use of Polite Forms by Japanese and Overseas Students in the First Contact Situation

Kitamura Koichiro

Abstract:
This paper aims to analyze strategic language use in multicultural interactions between Japanese and overseas students at a university in Japan by focusing on polite forms in Japanese. The main purpose of this study is to investigate how the L1 and L2 speakers of Japanese make a linguistic choice in the first contact situations in which they make an adjustment according to a sense of distance and solidarity they realize in their ongoing interactions with each other. Through the conversation analysis, it becomes apparent that the meaning of using or not using polite forms is not always shared among the participants. It is posited that the result should come from the difference in their way of characterizing their relationships with others. The motivations for the style choice and style-shifting practiced only by the Japanese students are to be explained by discussing the interpersonal relationships in terms of a range of Japanese cultural values, or the two contrasting but shifting parameters of in-group and out-group. Based on the discussion, this study attempts to suggest ways of enhancing cross-cultural communication skills in Japanese as a common language to Japanese students as well as to international students.

キーワード：多文化間コミュニケーション、スタイルシフト、丁寧体、

＊　神田外語大学　外国語学部国際コミュニケーション学科　講師

初対面接触場面、会話分析

1.　はじめに

文化は、価値観や行動様式が一定の集団に共有されることによって構築され、その共有を可能にする最も有力な媒体は言語である。言語は、文化によって規定され、その規範に則った言語使用は文化を再構築する。日本の社会においては、人間関係が丁寧体の適切な使い分けを要求し、同時にその使用／不使用の選択が人間関係の固定化に影響している。日本語でのコミュニケーションにおいて良好な人間関係を維持構築しようとするとき丁寧体はそれを調整する重要な要素であるが、丁寧体の知識とそれを運用する能力が、日本語を話すすべての人に普遍的に求められるものであるかについては議論がある。

社会文化的規範に則った言語使用は、その社会に属する者にとって常識としてとらえられがちであり、言語と文化の相関性が意識されることは少ないかもしれない。しかし、その社会で生活を営もうとする人は母語話者に限らないという事実について、必ずしも認識が十分に浸透しているとは言えない。日本語によるコミュニケーションであっても、相手が母語話者でない場合、丁寧体の扱いにより人間関係をどのように認識しているかを判断できるか。また、日本語を非母語話者同士で話すとき、日本の社会文化的規範に基づいて丁寧体を運用できるか、あるいはそもそもその必要があるのか。本研究は、このような母語話者による解釈だけでは成立しない多文化間コミュニケーションの在り方を問う観点を出発点として展開する。

2.　研究の目的

グローバル化による社会変容ともないコミュニケーションが多様化している中、母語話者と非母語話者の関係性も変化している。実際に、英語については、1980 年代より学術的な潮流として World Englishes すなわち英語圏のみならず世界各地で話される英語が市民権を獲得しはじめ、規範は一つではなく、英語母語話者によってのみ決定されるものではないという理

解が浸透しつつある。一方で、日本の大学のように母語話者が多数を占める環境にある日本語については、それが非母語話者とのコミュニケーションで話される場面において「教える／教えられる」といった固定的な関係ないしは「言語ホスト／言語ゲスト」（ファン、1999:39）という役割関係が意識されがちである。多文化化が着実に進展している日本社会[1)]では、日本語を母語としない相手とのコミュニケーションに英語をはじめとする国際語だけでなく、日本語を「共通語（a lingua franca）」として使用する機会も増えていることから、国際コミュニケーション教育においては母語話者と非母語話者間の両者にとって中立である第三の視点でその言語管理を捉えていくことが求められる。

本研究は、日本人学生と留学生との多文化間交流において、それぞれが円滑にコミュニケーションをとるために意図的に行っている言語行動に着目し、それをストラテジーとして特徴づけることにより多文化間コミュニケーション能力育成にむけて明示的に教授する方法論を新たに構築しようとする研究の一環として、日本語の丁寧体使用に焦点をあてて対人関係に関わる方略的な言語行動を分析する。調査は、日本の大学で日本語の母語話者と非母語話者のペアが、国際交流を促進するための授業活動に参加する中で交わす初対面での会話データをもとに行い、丁寧体の使用／不使用、その混用さらには意図的なコードスイッチあるいはスタイルシフトを分析することで、対人関係に関わる方略的な言語行動について考察する。

上記の会話分析により、本研究では以下 3 点の研究課題を明らかにすることを目的とする。

(1) 日本人学生と留学生で、それぞれ初対面の接触場面におけるスタイルの選択に違いがあるか。
(2) 日本人学生と留学生のスタイルの選択およびシフトが、会話参加者間の社会的・心理的距離についての認識とどのよう関連しているか。
(3) 日本人学生と留学生のスタイルシフトを分析することによって、どのような教育的示唆を導き出せるか。

初対面接触場面において丁寧体の扱いを研究することは、話し手がどのように聞き手との人間関係を位置づけ、また進行する会話の中で位置づけしなおそうとする過程を明らかにすることにつながる。さらに、本研究で日本人学生と留学生との交流の場において、スタイルシフトの分析を展開することは、言語や文化的背景の異なる相手と円滑にコミュニケーションをとるための方略的な言語行動を特徴づけ、ストラテジーとして明示的に教授する方法論の開発に資する知見を提供することが期待される。

3.　研究の理論的枠組

日本語の丁寧語は、一般的に尊敬語・謙譲語と並び敬語の三区分の一つとされるが、必ずしも聞き手あるいは話題にあがる人に対する敬意を表すわけではなく、 話題の事柄を美化したり、 表現に敬意を含めたりする。Tsujimura（1996）は、丁寧語を相手への敬意において中立（neutral）であり、会話の交わされる場がフォーマル（formal）であることを表すとしている。フォーマルさ（formality）は、改まっているか、くだけているかという場面だけでなく、Irvine（1979）が指摘している通り、自己と他者の位置関係の意識（positional identities）を喚起させる側面もある。

言語形式の選択を話者間の人間関係からとらえた伝統的な研究として、Brown and Gilman（1972）がヨーロッパ諸言語の分析に用いた上下関係（power）と連帯感（solidarity）の枠組が有名であるが、日本語の敬語において重要な要素として、本研究では「ウチ」と「ソト」という社会文化的な概念がその使用に関わることにも着目する。例えば、尊敬語は尊敬の対象にあたる目上の相手だけでなく、 関係が疎い相手にも使用されることはBrown and Gilman の枠組で説明できるものの、 身内について外部の人に話す場合に使用されないことは、ウチとソトにもとづいた相対的な人間関係の認識が影響する点を考慮する必要性を示している。

丁寧体およびそのスタイルシフトと、話者間の社会的・心理的距離との相互関係を追究するにあたり、Kitamura（2016）は、ウチとソトの概念による分析が不可欠であるとして、以下のように論じている。

> Crucial to Japanese linguistic politeness is that style-shifting is codetermined by a range of cultural values, or the two contrasting but shifting parameters of *uchi* and *soto*. And equally important is the fact that, due to its fluid nature of the parameters, the frame of social relationships and contexts is not fixed but consistently negotiated in ongoing social interactions. The motivation for style- shifting from one form to the other is therefore to be discussed further by examining how people extensively relativize a boundary of in-group and out-group relationships with each other in their social encounters. Kitamura（2016:212）

社会文化的な概念について特筆すべきは、ウチとされる概念が流動的な性質を持ち、それゆえ枠組みされる領域も可変的であるという点である。実際に、ウチの領域は、話し手の家族や親族に限定されず、非血縁関係者である友人や共同体など所属する集団についても適用される。個人は同時に複数の社会的カテゴリーに属するため、同じ学校、会社、町会、政党、宗教団体といった特定の集団への帰属意識、さらに同じような趣味や思想を持つ人たちへの仲間意識など、自己と他者との人間関係の枠組みをウチととらえる要素は多様である。

個人がある特定の集団への帰属を意識するとき、その集団に特有の言葉遣いが顕在化することがあり、集団との関わり方を示す社会的指標としてその管理は 1 つのアイデンティティ行為であると言える。とりわけ丁寧体の扱いについては、スタイルの選択およびそのシフトを分析することは、話し手のどの社会的属性が前景化されるかを明らかにする有効な手がかりとなりえる。本研究では、Usami（2002）の指摘する丁寧体を使用しない選択もまた話し手の聞き手との社会的・心理的な関係についての認識を反映するという点も踏まえ、丁寧体の扱いを対人関係に関わる方略的な言語行動として捉え、その動機をウチとソトの観点から明らかにしていく。

これまでのスタイルシフトに関する研究では、談話機能（生田・井出、1983）、他者との相対的な自己の認識（Maynard, 1991）、生起する条件の分類と機能（宇佐美、1995）などの分析に代表されるように、フォーマルさよりも、むしろ会話参加者間の社会的・心理的距離における認識の変化から論

じることでその意味が追究されてきた。また、三牧（2013）では、ポライトネスの観点から丁寧体と非丁寧体との「スピーチレベルシフト」（ibid:85）が生起する条件と果たす機能について談話レベルでの実証研究によって分析している。本研究においても、コミュニケーションは話し手と聞き手による相互行為であるとする視点から、丁寧体の扱いを個人に焦点を当てて論じるのではなく、会話参加者間での評価とそれに応じた調整を伴い共同して行われる言語管理として分析していく。

4.　調査の概要

本研究は、日本語の母語話者と非母語話者がそれぞれ初対面接触場面での丁寧体の扱いについて、一方のスタイルの選択が相手にどのように受けとめられるのか、 またその言語行動は話者間でどのように共有されるのか、 それぞれの人間関係についての認識と関連させて考察する。 調査は、日本の大学において、中国、ベトナム、韓国からの留学生を対象とした英語のクラスに、日本人学生を新規ビジターとして招くことで両者の交流の機会を促進しようとする活動において実施し、そこで記録した日本語での会話データをもとに分析を行う。

留学生

この多文化交流のための授業活動に参加する留学生は、海外から半年・1 年間の期間だけ在籍する別科生ではなく、 日本人学生と同様に入学して 4 年間学び卒業していく学部留学生である。大学では、 語学科目や一部の専門科目を除いては日本語で履修することが前提となっているため、入学時に日本語能力試験において高い得点を取得していることが求められる。また、留学生の多くは大学入学前に日本語学校や専門学校で学び、その間にアルバイトとして日本語を使って働いた経験を持つことから、日本語は大学で講義を受けるにあたっても、職場でのやり取りを含めて日常生活を送るにあたっても、大きな困難を感じることのないまでに流暢さを獲得している第二言語である。一方で、英語については第二というよりは外国語にあたり、その学習経験や習熟度に濃淡がある。国際交流活動は、初級～

中級レベルの留学生を対象とした英語クラスで実施されている。

日本人学生

多文化交流のための授業活動に参加する日本人学生は、履修生ではなく開催の度に大学内にて希望者を募るビジターである。英語を母語としない学習者同士で、異なる言語・文化的背景を持つ学生との交流の機会を促進する趣旨で募集するため、中国語、ベトナム語、韓国語を専攻言語や第二外国語として学んでいたり、その国や文化に興味を持っていたりすることが参加希望の理由にあげられる。他に大学で開催される多文化交流の活動と比較すると、留学生の日本語学習を支援する役割は求められないため、日本語教育に関心のない学生の参加も多い。また、英語圏からの留学生が相手ではないことから、英会話の練習を目的として参加を希望する日本人学生は少ない。日本人学生の英語能力は、外語大学の学生であることから全体的に高いことが予測されるものの、本調査に参加する留学生と同様に話す技能に関しては大多数が苦手意識を持っていると報告している。

活動の目的と人権の保護および法令等の順守への対応

多文化間コミュニケーションの機会を授業で設けるのには、二つの目的がある。一つは、英語を学ぶ留学生に、また日本人学生にとっても互いに外国語である英語を共通語として使用して活動することにより、言語能力そのものだけでなく、国際コミュニケーション能力の向上を図る教育目的である。もう一つは、英語での活動とその前後に日本語でのやり取りする初対面の接触場面での会話において、言語使用の実態を調査する研究目的である。本研究では、丁寧体の扱いを対象とし、後者の目的を兼ねて開催する回において参加者の会話を録音することでデータ収集を行う。

なお、調査は人権の保護および法令等の順守への対応として、神田外語大学で定めた「『人を対象とする研究』の倫理および倫理審査規定」に従い審査を経た上で、十分に配慮して実施する。具体的には、任意の参加者を対象とし、活動に参加中および参加後のいつでも言語データ提供を中止できることも含め、口頭および書面による説明を徹底し、同意確認書を共有

する。また、録音された会話から抽出する言語データについては、個人が特定されない秘匿性を確保して使用する。

5. 方法

研究は、2019 年に収集した日本人学生 6 名と留学生 6 名のペアによる音声データをもとに会話分析を行い、方略的な言語行動について考察する。参加する留学生の出身国の内訳は、中国 4 名・ベトナム 1 名・韓国 1 名である。日本人学生と留学生の初対面の接触場面での会話をとらえるように設定するため、あらかじめ教室内にペアで向かい合うように配置した机を 6 カ所に間隔を空けて準備し、それぞれ IC レコーダーを真中に置いておく。履修生である留学生のみ一方の席に着いて待機しているところに、教室の外で集合した日本人学生がビジターとして入室を促され、それぞれ空いているもう一方の席に着いてペアをつくる流れで進め、会話データの録音は最初に言葉を交わす時点で開始される。なお、参加者には、事前に進行についての説明と研究に関する同意確認を済ませてあり、活動中の教員からの働きかけは、開始と終了時間の告知のみとし、最小限にとどめる。

他の多くの研究が、初対面の一度きりの会話におけるスタイルの選択に焦点をあててきたのに対し、本研究では、話し手が聞き手との人間関係をどのように位置づけ、また状況に応じて位置づけしなおそうとするのか、その過程にも着目する。そのため調査では、初対面での接触場面を 1 回で完結させず、英語でのコミュニケーション活動を間に挟み、2 回目の場面を設けることにより、時間の経過に伴う丁寧体の扱いの変化をとらえようとする。活動は、以下のように三部構成で進行する。

第一部：挨拶と自己紹介（日本語）

第二部：コミュニケーション活動（英語）

第三部：活動の振り返り（日本語）

日本語によって会話をする枠を設けるのには、留学生が日本人学生との英語力の差から圧倒されて活動への参加が消極的になりがちな傾向を改善するねらいがある。また、再び日本語での振り返りの場を設けることで、互いに英語で話した内容が相手に伝わっているか、とくに誤解や失礼に感

じられる発言などはなかったかを両者で確認する中で、情報や表現力不足を補ったり、おもしろいと感じた点を共有したりする機会を提供する。

本調査での活動では、各部の時間をすべて 10 分間に設定し、第一部での挨拶・自己紹介と第三部での活動の振り返りで、合計 20 分間の日本語による会話を記録している。また、同じ参加者でペアを入れ替え、2 週間にわたり 4 回実施したことで得た 6 組のペアによる日本語での会話データの総時間は、480 分間となる。本研究では、参加者が活動の流れを把握し、普段と違った教室の環境に気を取られなくなる回として、最終の 4 回目における 120 分間の会話データに対象を絞って分析する。

6. 結果

第一部に日本語で開始した初対面での会話データ 6 件と第三部に日本語で再開した会話データ 6 件を合計した 12 件において、日本人学生 6 名を母語話者として L1（a）、L1（b）、L1（c）、L1（d）、L1（e）、L1（f）、留学生 6 名を非母語話者として L2（A）、L2（B）、L2（c）、L2（D）、L2（E）、L2（f）と表記し、それぞれ丁寧体使用の割合を調査した。なお、アルファベットの大文字／小文字の表記は、話者の性別をそれぞれ男性／女性の判別をしている。結果は、以下の表 1 の通りである。

表 1　丁寧体使用の割合

	全体			第一部		第三部	
ペア	参加者	使用率（数）		使用率（数）		使用率（数）	
1	L1（e）	85.2%	（115/134）	78.3%	（54/69）	92.4%	（61/66）
	L2（A）	57.6%	（83/144）	59.5%	（47/79）	55.4%	（36/65）
2	L1（c）	70.1%	（61/87）	72.2%	（39/54）	66.7%	（22/33）
	L2（B）	9.8%	（15/153）	16.7%	（14/84）	1.4%	（1/69）
3	L1（d）	15.5%	（11/71）	31.0%	（9/29）	4.8%	（2/42）
	L2（c）	3.2%	（4/125）	6.3%	（4/63）	0.0%	（0/62）
4	L1（b）	5.3%	（10/187）	9.5%	（10/105）	0.0%	（0/82）
	L2（D）	75.3%	（137/182）	89.5%	（85/95）	59.8%	（52/87）

5	L1（f）	6.3％	（ 11/176）	13.0％	（ 10/ 77）	1.0％	（ 1/ 99）
	L2（E）	71.9％	（100/139）	71.6％	（ 53/ 74）	72.3％	（ 47/ 65）
6	L1（a）	66.7％	（ 66/ 99）	80.0％	（ 40/ 50）	53.1％	（ 26/ 49）
	L2（f）	66.9％	（ 85/127）	70.6％	（ 48/ 68）	62.7％	（ 37/ 59）

会話では、発話の重なりによって文を最後まで言い切らないことが多く、本調査においても文末が確認できない例が散見され、実際の発話量に対し数は少ない結果となっている。丁寧体使用の割合について、表 1 で分析の対象としている発話は、文末表現の動詞＋「ます」、イ形容詞・ナ形容詞・名詞述語＋「です」の活用形（丁寧形）に限り、使用の確認されなかった「ございます」の他、名詞・こそあど・応答詞の区別についても計上していない。

また、表 1 の数には、相槌や相手の言ったことをそのまま確認のために復唱する発話なども含めていない。さらに、下に例 1 と例 2 で示すように相手を意識しての発話というよりも自身に向けた独り言と同様に受けとめられる例なども、丁寧体使用の割合を算出するにあたり、本調査では分析の対象としない。

例 1　日本人学生と留学生の会話データ（1）ペア 2　第一部

158. L1（c）：でも、時事英語、確かに時事英語難しいって、すごい、
159. L2（B）：そうなの？ それ聞いてないけど。
160. L1（c）：2 年生からしか取れなくて、
161. L2（B）：え、1 年生じゃないの？
162. L1（c）：1 年、1 年で、まだその 2 年生の先輩
163. L2（B）：そう、1 年生で取れるんじゃないの？
164. L1（c）：1 年は取れないの。
165. L2（B）：うっそ！
166. L1（c）：え、なんか、え、取れるかな？ 取れるかも。取れるかもしれないんですけど、なんか、結構その 2 年生とか優先され

て、

167. L2（B）：そんなことあるんだ？

例 2　日本人学生と留学生の会話データ（2）ペア 3　第一部

82. L1（d）：あとレポートも、今日も提出いっぱいあって、
83. L2（c）：そうなの？
84. L1（d）：そうです。
85. L2（c）：期末は、やばい。
86. L1（d）：テストもあって、
87. L2（c）：ふうん、じゃあ、授業もいっぱい埋まってるの？　英米だと、英米学科だと？
88. L1（d）：うちは、何単位だろ？ 22 単位くらいとってて、
89. L2（c）：結構授業あるんじゃない？

例 1 では 166 番目の発話で、ある科目が 1 年生にとって履修可能であるかどうかについて日本人学生 L1（c）は「取れるかもしれないんですけど」と丁寧体で相手に考えを伝えているが、その直前の発話（「取れるかな？」「取れるかも。」）は丁寧体ではない。同様に、例 2 の 84 番目の発話でも、レポート課題について話す場面で日本人学生 L1（d）は、「そうです。」と丁寧体を使用しているが、その後の 88 番目の発話（「うちは、何単位だろ？」）では使用していない。例 1 と例 2 での発話に共通している点は、丁寧体の使用に変化が見られるものの、それぞれ履修条件、履修済の単位について自分の理解を確認するもので、いずれも相手に直接に向けた発話ではないと受けとめられることから、表 1 で分析の対象とする発話に含めていない。

表 1 からは、以上の観点を踏まえて丁寧体使用の割合を算出した結果、参加者の発話を「日本人学生」・「留学生」という組で分けてとらえられる特徴は見られない。表 1 における全体の使用率は、丁寧体の使用／不使用のどちらを標準のスタイルに選択するかは個々の話者によって異なること

を示している。実際に、日本人学生の中でも L1（e）・L1（c）・L1（a）のように、それぞれ 85.2%・70.1%・66.7%と使用率の高い話者もいれば、逆に L1（d）・L1（b）・L1（f）のように、それぞれ 15.5%・5.3%・6.3%と使用率の低い話者もいる。同様に、留学生の中でも L2（D）・L2（E）・L2（f）のように、それぞれ 75.3%・71.9%・66.9%と高い使用率、L2（B）・L2（c）のように 9.8%・3.2%と低い使用率、さらには L2（A）のように 57.6%とその中間に近い使用率を示す話者もいる。

表 1 における丁寧体使用の割合は、全体だけでなく、第一部と第三部に分けて表示することで、その増減の結果を示している。本研究調査では、スタイルシフトの起こる場面を特定していくため、さらに各 10 分間の会話を 4 分割して、2 分 30 秒ごとに区切って表示することにより、その変化の推移をとらえていく。結果は、以下の表 2・表 3 の通りである。

表 2　丁寧体使用の割合：2 分 30 秒毎（1）

第一部		① 0:00-2:30	② 2:30-5:00	③ 5:00-7:30	④ 7:30-10:00
ペア	参加者	使用率（数）	使用率（数）	使用率（数）	使用率（数）
1	L1（e）	82.4%（14/17）	79.2%（19/24）	66.7%（10/15）	84.6%（11/13）
	L2（A）	70.0%（14/20）	47.8%（11/23）	52.9%（ 9/17）	68.4%（13/19）
2	L1（c）	65.2%（15/23）	92.9%（13/14）	50.0%（ 3/6）	72.7%（ 8/11）
	L2（B）	44.0%（11/25）	13.6%（ 3/22）	0.0%（ 0/19）	0.0%（ 0/18）
3	L1（d）	42.9%（ 3/ 7）	20.0%（ 1/ 5）	40.0%（ 4/10）	36.4%（ 4/11）
	L2（c）	30.8%（ 4/13）	0.0%（ 0/14）	0.0%（ 0/19）	0.0%（ 0/17）
4	L1（b）	29.0%（ 9/31）	3.7%（ 1/27）	0.0%（ 0/24）	0.0%（ 0/23）
	L2（D）	88.0%（22/25）	91.7%（22/24）	92.0%（23/25）	85.7%（18/21）
5	L1（f）	30.0%（ 6/20）	10.0%（ 2/20）	10.0%（ 2/20）	0.0%（ 0/17）
	L2（E）	78.9%（15/19）	52.6%（10/19）	76.2%（16/21）	80.0%（12/15）
6	L1（a）	78.6%（11/14）	75.0%（12/16）	81.8%（ 9/11）	88.9%（ 8/ 9）
	L2（f）	100.0%（18/18）	50.0%（10/20）	53.3%（ 8/15）	80.0%（12/15）

表 3　丁寧体使用の割合：2 分 30 秒毎（2）

第三部		① 0:00-2:30	② 2:30-5:00	③ 5:00-7:30	④ 7:30-10:00
ペア	参加者	使用率（数）	使用率（数）	使用率（数）	使用率（数）
1	L1（e）	93.3％(14/15)	82.4％(14/17)	100.0％(15/15)	94.7％(18/19)
	L2（A）	40.0％(4/10)	57.9％(11/19)	76.9％(10/13)	47.8％(11/23)
2	L1（c）	44.4％(4/ 9)	60.0％(3/ 5)	92.3％(12/13)	50.0％(3/ 6)
	L2（B）	0.0％(0/13)	0.0％(0/16)	5.6％(1/18)	0.0％(0/22)
3	L1（d）	22.2％(2/ 9)	0.0％(0/11)	0.0％(0/12)	0.0％(0/10)
	L2（c）	0.0％(0/14)	0.0％(0/11)	0.9％(0/17)	0.0％(0/20)
4	L1（b）	0.0％(0/23)	0.0％(0/17)	0.0％(0/25)	0.0％(0/21)
	L2（D）	63.2％(12/19)	26.7％(4/15)	62.5％(15/24)	72.4％(21/29)
5	L1（f）	3.2％(1/31)	0.0％(0/26)	0.0％(0/17)	0.0％(0/25)
	L2（E）	70.6％(12/17)	87.5％(14/16)	61.5％(8/13)	68.4％(13/19)
6	L1（a）	20.0％(2/10)	85.7％(12/14)	77.8％(7/ 9)	31.3％(5/16)
	L2（f）	90.0％(9/10)	70.6％(12/17)	53.3％(8/15)	47.1％(8/17)

7.　考察

表 1 での全体の使用率からは、丁寧体を使用するかしないかで二分され、それぞれスタイルの使用が固定しているように見えるが、表 2・表 3 では丁寧体の扱いに様々な変化があることが確認できる。変化が起こっている時間帯にどのような会話が日本人学生と留学生との間で交わされているか会話分析をしていくことにより、両者がどのようにスタイルの選択およびシフトを遂行するか、その言語行動に対して両者の認識に違いがあるか、そしてその分析の結果から両者の多文化間コミュニケーションについてどのような示唆が得られるのか考察する。

7.1.　初対面の接触場面におけるスタイルの選択

日本人学生と留学生による丁寧体使用の割合を、表 2 で示された第一部の中でも最初の時間帯にあたる開始から 2 分 30 秒までの会話で確認すると L1（b）の 29.0％をはじめ L1（f）の 30.0％、L2（c）の 30.8％から L2（f）の 100.0％まで数値に大きく差はあるものの、全体では 0％に近い数値を示している話者を含め、すべての話者が一度は丁寧体を選択していることがわかる。しかし、次の 2 分 30 秒から 5 分 00 秒までの時間帯では、その選択が安定している話者と変化している話者との違いが顕著に表れている。

表 2 および表 3 における丁寧体使用の割合から、個々の増減の幅だけでなく、その方向性に注目すると、上昇しているか下降しているかによって最初に選択したスタイルを維持しているか、逆に再選択しているかを把握することができる。丁寧体の使用率から、標準のスタイルとして丁寧体を比較的安定してそのまま使用している話者：L1（e）、L1（c）、L1（a）と L2（A）、L2（D）、L2（E）、L2（f）と、使用しなくなる話者：L1（d）、L1（b）、L1（f）と L2（B）、L2（c）とに大きく二分される。

本調査での参加者に関しては、日本人学生と留学生という組で整理すると、それぞれ前者は 3 名・4 名、後者は 3 名・2 名となり、スタイルの選択については、両者の間に大きな差は見られない。ただし、選択の方向性は一致している中でも、丁寧体の使用率には個々で差があることから、最初に選択したスタイルを維持、あるいは再選択をするきっかけとなる要素を明らかにしていく必要がある。日本人学生と留学生との間で丁寧体の認識がどのように共有されているかを可視化することは、母語が異なる両者の円滑なコミュニケーションを促進する方法論を発展させていく上で重要な知見となると期待される。本研究では、会話参加者間の丁寧体についての認識が言語的に表出される場面においてとらえるため、これより丁寧体の使用／不使用の動機をそれぞれ実際の会話から探っていく。

調査で収集したデータの中で、スタイル選択の動機を説明する鍵として最も顕著に示されている情報は、以下の例 3 に示す、ペア 4 の日本人学生 L1（b）による丁寧体の使用について直接言及している発話にある。

例 3　日本人学生と留学生の会話データ（3）ペア 4　第一部

34. L1（b）：で、スペイン語を勉強しています、大学で。
35. L2（D）：スペイン語、スペイン語学科ですか？
36. L1（b）：スペイン語学科で、2 年生です。
37. L2（D）：2 年生、
38. L1（b）：だからタメ口で、あはは、だいじょうぶです。
39. L2（D）：よろしくお願いします。
40. L1（b）：お願いしまーす。
41. L2（D）：趣味は何ですか？
42. L1（b）：趣味、は、スポーツ大好きです。
43. L2（D）：あ、スポーツ好きですか？
44. L1（b）：大好き。
45. L2（D）：何のスポーツですか？
46. L1（b）：今まで、体操と、
47. L2（D）：体操、
48. L1（b）：サッカーと、バレーボールと、ダンスやってた。
49. L2（D）：一番得意は何ですか？
50. L1（b）：バレーボール。
51. L2（D）：バレーボール、バレーボールは私やったことないんですけど、
52. L1（b）：うん。
53. L2（D）：ここが、ちょっと痛い、
54. L1（b）：痛い痛い。痛いよね。

例 3 では 38 番目の発話で、日本人学生 L1（b）は、相手も同じ「2 年生」であることを知り、その上で「だからタメ口で」と伝えることで、丁寧体を使わないで話すことを提案している。留学生 L2（D）は、その提案に反応せずに引き続き丁寧体に使用を続けているものの、日本人学生 L1（b）は、自身が提案した通り丁寧体を使用しない選択をし、その後も相手から

影響を受けることなく、そのスタイルを継続している。実際に、表 2・表 3 では、丁寧体を 2 分 30 秒から 5 分までに 1 回、その後は英語での活動を経て再開した会話においても最後まで 1 回も使っていないことが確認できる。結果として、ペア 4 での話者間のスタイルは対照的になっている。

学年や年齢については、同じであることと同様に、差があることもまた丁寧体の扱いに大きく関わる。下の例 4 と例 5 では、話者間の学年が同じでないという情報から、先輩／後輩という上下の関係が互いに意識され、その社会的な距離感がスタイルの選択あるいは相応のスタイルへの再選択に影響していると見られる。

例 4　日本人学生と留学生の会話データ（4）ペア 2　第一部

9. L2（B）：何学科ですか？
10. L1（c）：英米語学科です、まだ 1 年生です。
11. L2（B）：あ、じゃあ緊張するわ。
12. L1（c）：えー、ふふふ。
13. L2（B）：英米、だってさ、もう 1 年でも、けっこう英語強くない？
14. L1（c）：いや強くない、ふふふ。
15. L2（B）：やばい！
16. L1（c）：強くない、ぜんぜん。
17. L2（B）：やべーな、英米。1 年生で英米の友達がいて、
18. L1（c）：はい。
19. L2（B）：友達というか、後輩がいたんですよ、今でも。
20. L1（c）：英語しゃべれたんですか？
21. L2（B）：いや、英語で、英語でしゃべってない。
22. L1（c）：ああ、日本語でしゃべる、
23. L2（B）：バイト先の後輩なので、
24. L1（c）：どこでバイトしてるんですか？

例 4 の会話では、23 番目の留学生 L2（B）の発話に相手の日本人学生 L1

(c) との人間関係を位置づける情報として、「バイト先の後輩」についての言及がある。直前の会話で日本人学生 L1 (c) が英米語学科の 1 年生であると知り、留学生 L2 (B) は、同じく英米語学科の 1 年生であるアルバイト先での後輩と近い存在に位置づけたと解釈される。同様に、日本人学生 L1 (c) にとっては、留学生 L2 (B) は同級生の先輩にあたることから、自身も後輩と同等に位置づけられることに違和感はないかもしれない。結果的に表 1 で丁寧体使用の全体の割合が示す通り、留学生 L2 (B) が 9.8％であるのに対し日本人学生 L1 (c) が 70.1％と、両者のスタイルは対照的になっている。

例 5　日本人学生と留学生の会話データ (5) ペア 5　第一部

7. L1 (f)：あ、何年生ですか？
8. L2 (E)：2 年生です。
9. L1 (f)：4 年生です。
10. L2 (E)：ああ、じゃあ、もう仕事決まって、
11. L1 (f)：そうですね。
12. L2 (E)：ああ、
13. L1 (f)：やっているけど、あ、決まってるけど、でも就活はやってる。
14. L2 (E)：ああ、はい。あの、すごいですね。
15. L1 (f)：いや。
16. L2 (E)：先輩だ。感心するよ。

例 4 のペアと日本人学生と留学生の位置関係が逆であるが、例 5 のペアによる会話でも、同様に先輩／後輩という人間関係の枠組が話者間で共有されていることが表 2・表 3 の丁寧体使用の割合と関連させて説明できる。留学生 L2 (E) は、16 番目の発話で相手の日本人学生 L1 (f) に対して「先輩」という言葉を用いることで、その人間関係を決定づけている。ペア 5 での全体の会話の中では、他にも日本人学生 L1 (f) を留学生 L2 (E) が「先輩」と呼びかける場面が 2 回確認される。その先輩／後輩の人間関係の認

識が、表 1 で丁寧体使用の全体の割合に 6.3％と 71.9％という顕著な差を示すほど両者のスタイルを対照的にする要因と考えられる。

7.2.　進行する会話の中でのスタイルシフト

日本人学生と留学生による会話データを分析する中で、スタイルの選択に関しては、両者とも学年や年齢などによる差から、相手との社会的あるいは心理的な距離をはかり、丁寧体／非丁寧体を標準として話をしていることが確認できる。一方で、表 2 および表 3 から、丁寧体使用の割合を時間帯ごとに比較していくと、その数値が安定している話者と、所々で変化している話者がいることが確認される。その差に留意してスタイルシフトが起こる場面を、実際の会話の中で特定していくと、日本人学生と留学生とで別々な特徴が、スタイルの混用、および丁寧体からのシフト／丁寧体へのシフトの両方向へのスタイルシフトのそれぞれに見えてくる。以下に会話データを提示しながら、両者の特徴について考察する。

スタイルの混用

例 6　日本人学生と留学生の会話データ（6）ペア 1　第一部

9. L1（e）：え、どこの方（かた）ですか？
10. L2（A）：えっと、中国。
11. L1（e）：中国の方なんですね！　えー、日本語上手だな、ふふふ。

144. L2（A）：えっと、昔ははっきりわかるけど、今はだんだん、そのなんか、北、北の人は、南に行くし、南の人は、えっと北に行くし、だから、だんだん、みんな餃子とワンタンを両方食べる、
145. L1（e）：へえ。
146. L2（A）：ようになりましたが、えと、実ははっきり分けるのは、南の方はワンタン、

147. L1（e）：あ、そうなんですね。知らなかった。

170. L2（A）：そうです、確かに。はい。
171. L1（e）：おもしろい。なんかみんなでワイワイ食べるから美味しいんですよね。

例6での日本人学生L1（e）による11番目・147番目・171番目の発話ではそれぞれ丁寧体と非丁寧体が同時に使用されている。共通する特徴として相手に向けられた発話は丁寧体（「中国の方なんですね」・「そうなんですね」・「美味しいんですよね」）、直接相手にというよりは自分の感想を表現している発話は非丁寧体（「日本語上手だな」・「知らなかった」・「おもしろい」）となっている点があげられる。これらの発話は、その機能の違いから混用というよりも併用であり、相手に対する社会的・心理的な距離の認識の変化によるスタイルシフトとは認められない。こうした両方スタイルの同時使用は、他の日本人学生の発話に見られるものの、本調査に参加した留学生の発話にはほとんど見られない特徴の一つとしてあげられる。

丁寧体からのスタイルシフト

例7　日本人学生と留学生の会話データ（7）ペア3　第三部

18. L1（d）：○○（※商品名）は、すごいオススメ、オススメです。
19. L2（c）：そうなの、あたしもニキビばっかり。
20. L1（d）：すぐできちゃって、なんか。季、季節が変わる時に、すごい。
21. L2（c）：うん。私も、ちょーやだ！　友だ、知ってる人がその○○、使ってて、いいって言われて、
22. L1（d）：うんうん。
23. L2（c）：自分が、乾燥肌用のタイプの、あれ、○○何種類かある？
24. L1（d）：あの、なんか化粧水もあるし、化粧品もあるし、
25. L2（c）：なんか、ニキビ用の○○ある

26. L1（d）：うんうんうん。
27. L2（c）：あるんだよね、何色だっけ？　水色？
28. L1（d）：えっと、青かピンクか、
29. L2（c）：そうなの。
30. L1（d）：黄色か紫。
31. L2（c）：うんうんうん。
32. L1（d）：化粧水が、あともう 1 つあった気がする。5 種類くらいあってで、今自分は水色のニキビ用の、ニキビ予防してくれるし、そういう季節の変わり目に荒れちゃう肌みたいの、
33. L2（c）：あたし、ピンクのあれ、トライヤルセット買ったんだけど、
34. L1（d）：うん。
35. L2（c）：私、そんなに、なんか、使ったらカサカサになっちゃって、
36. L1（d）：あ、そうなん？　えー、ピンク、ピンクって乾燥用だったような気がする。
37. L2（c）：そう、乾燥用、そうそうそう、そのまだ冬のとき、まだ寒い、寒いとき、買ったんだ。で、乾燥肌用の、あのピンクのトライヤルのセットの買ったんだけど、でも、なんか使ったら、ここクスクスになっちゃって！
38. L1（d）：えー！　へへへ、そうなの？
39. L2（c）：あれー、赤くなる、あれあれ？　て。
40. L1（d）：あははは。

例 7 では、日本人学生 L1（d）が、丁寧体を使用しない方向へシフトする場面の一部を提示している。スタイルシフトは、例 3 で日本人学生 L1（b）が「タメ口で」と伝えて提案するような直接的なきっかけが示される例は本調査でも他になく、多くの場合このように会話の流れの中で見られる。それは自然に起こっているかのように、流れに影響がない変化に見えがちであるが、あまり意識していない場合であっても、意図がないということはなく、話し手による相手との人間関係についての認識の変化を反映しており、結果として方略的に遂行されたと解釈される例が多い。

実際に、例 7 では日本人学生 L1（b）にとって留学生 L2（c）は親しい関係にない初対面の相手で、先の会話から学年において上であることも承知していることから丁寧体の使用が見られるが、親しみを感じさせる共通の趣味あるいは思い入れの強い好きな化粧品について話が盛り上がる場面に限りその使用が見られなくなる。また、例 7 の会話の後に続く会話の中では、再び丁寧体が使用されるが、苦労した英語資格試験と授業での口頭発表に関する経験に話が及び、強い共感を示し合う場面で使用されなくなる。

このスタイルシフトは、最初に標準とするスタイルを選択する言語行動とは違い、会話中に何度か確認される。その動機として、相手との社会的・心理的距離についての認識に何らかの変化が生じたことが想定されるが、その認識の変化をウチとソトの概念でとらえると、その枠組が固定されない流動的な性質から、スタイルシフトを説明することができる。つまり、例 7 では日本人学生 L1（b）は、留学生 L2（c）を、初対面で学年も上の親しくない相手としてソトの人間関係でとらえているときには丁寧体を使用し、思い入れの強い好きなことを共有できる親しい相手としてウチの人間関係でとらえているときに丁寧体を使用しなくなる傾向があると考えられる。

丁寧体からのスタイルシフトにおいては、同様にウチの人間関係が相手との間に意識されることをその動機と解釈できる例が、他の日本人学生の発話にも見られる。例えば、ペア 6 での日本人学生 L1（a）の丁寧体使用率は、表 1 において全体では 66.7％と高い数値を示しているものの、表 3 において 2 つの時間帯で 20.0％と 31.3％へと変化しているが、このスタイルシフトも、ウチとソトの人間関係の認識と関連させて説明できる。例 7 の状況と同様に、丁寧体の使用率が一時的に下がったのは、ソトの人間関係に位置づけられていた初対面の留学生 L2（f）に対し、共通の趣味である韓国のアイドルグループ、韓国での旅行について話している中で気分が高揚し親しみを感じたことで、ウチの人間関係が意識された結果と推測される。

ウチとソトの人間関係の枠組について特徴的なのは、その流動性であり学年や年齢といった明確で固定的な枠組のように継続していくとは限ら

ず、進行する会話の中でどの枠組を想定するかにより、ウチとソトが替わることである。例えば、韓国のアイドルグループについて話が盛り上がっているときには、ファン同士というウチの人間関係が前景化しているが、他の話題に移るときに、それまでの枠組でのウチの仲間意識がそのまま継続される場合と振り出しにもどる場合がある。後者の場合には、ソトの人間関係への認識の変化が、丁寧体へのスタイルシフトという形で、言語的に表出されることもある。

丁寧体へのスタイルシフト

例 8　日本人学生と留学生の会話データ（8）ペア 5　第一部

150. L2（E）：就職活動もほぼ決まっているし、完璧じゃないですか。
151. L1（f）：いやいやいや。
152. L2（E）：え、どこが完璧じゃないと言うんですか。
153. L1（f）：ははは。中国のどこの出身ですか？
154. L2（E）：私は、北京です。
155. L1（f）：北京なんだ、へー、すごい。
156. L2（E）：いやいやいや。
157. L1（f）：首都じゃないや、
158. L2（E）：首都です。
159. L1（f）：首都か。え、すご。じゃや、基本的な中国語なんだね。
160. L2（E）：まあ、ま、すこし、ちょ、ちょっとなんか、発音は標準語と比べて違うところもあるんですけど。
161. L1（f）：そうなんだ？

表 2・表 3 から、日本人学生 L1（f）の発話では、最初の 2 分 30 秒までの間でも 30.0％と丁寧体の使用率は高くはなく、その後すぐに減少していることがわかる。その推移を時間帯ごとで見ると、第一部では 10.0％、10.0％になってから、第三部では一度 3.2％になってからと、0.0％になるまでに

いくつかの場面でスタイルシフトをしていることもわかる。例 8 で示した 153 番目の「中国のどこの出身ですか？」という発話はその一例であり、さらに上記以外でも「何単位とっているんですか、今学期？」、「日本語の授業、難しくないですか？」、「ジェット・コースター、好きですか？」といった発話で、丁寧体へのスタイルシフトが確認される。

これらの発話に共通する点は、前後の発話で丁寧体が使用されていないことと、直前までの会話の内容とは違った新しい内容に話題が転換されていることである。例 8 に見られる日本人学生 L1（f）による丁寧体へのスタイルシフトは、ウチとソトの枠組の流動的な性質を示すと同時に、その枠組による丁寧体の方略的な運用を分析する上での有用性を示している。

ウチとソトの概念は、日本人学生 L1（f）の想定する相手との関係の枠組が多重であることを踏まえ、どの枠組が前景化しているかを丁寧体の扱いから明らかにする点で有用である。まず、学年や年齢の観点から 4 年生である日本人学生 L1（f）は、留学生 L2（E）が度々「先輩」と呼びかけていることからもわかるように、両者は社会的な距離においてソトの関係にある。その先輩／後輩という上下関係において、後輩に位置づけられる留学生 L2（E）に対し、丁寧体を使用しない選択をしていると解釈することができる。

また、同時に、多文化交流活動に参加する学生同士という仲間意識の観点から、日本人学生 L1（f）は、留学生 L2（E）との心理的な距離においてウチの関係にあると想定しているために、丁寧体を使用しない選択をしていると解釈することもできる。

後者の枠組による人間関係の認識が前景化しているとき、新しい話題に移るにあたり相手のことを、まだ会ったばかりでどんな人かよく知らないソトの存在と意識することが、丁寧体へのスタイルシフトの動機であるとする。言い換えると、丁寧体へのスタイルシフトは話し手が相手との人間関係をソトとして位置づけしなおそうとする認識を言語的に表出した結果であると考えられる。話者間の社会的・心理的距離について、ウチとソトの枠組による分析は、スタイルシフトとの相互関係を解明する鍵である。

表 2・表 3 で 6 名の留学生による丁寧体使用の割合を見ると、数値の上

では日本人学生の例と同様の変化も見られる。例えば、ペア 1 での留学生 L2（A）の丁寧体使用率は、第一部の終盤 7 分 30 秒から 10 分では 68.4％とその直前の時間帯での 52.9％から増加、第三部の開始 5 分から 7 分 30 秒では 76.9％と、その前後の時間帯での 57.9％・47.8％から増加している。ただし、この丁寧体へのシフトが確認される二つの場面は「マレーシアとシンガポールの歴史背景」と「スペイン語と日本語の発音」について解説する長い発話にある。同様の例が、ペア 4 で留学生 L2（D）が「アルバイト先の給与体系」について説明する一連の発話にも見られる。第三部の開始 2 分 30 秒から 5 分 30 秒では 26.7％と、その前後の時間帯での 63.2％・62.5％から減少する逆方向へのシフトであるが、そこに共通する特徴は、会話というより、挿入された独話のような性質が見られることである。

スタイルシフトは、社会的・心理的距離の認識の変化に応じて方略的に対人関係を調整する機能を有してはいるものの、日本人学生と留学生との多文化間コミュニケーションにおいては、その機能が必ずしも両者の間で共有されないこともある。実際に、方略的に遂行されていると解釈されるスタイルシフトは、前述のスタイルの混用と同様に、本研究調査においては、一部の日本人学生の発話に限り、留学生の発話には見られない特徴の一つとしてあげられる。

8.　まとめと今後の課題

本研究では、日本人学生と留学生との日本語によるコミュニケーションから、方略的な言語行動として丁寧体の使用／不使用、その混用と意図的なスタイルシフトを分析することで、以下の 3 点について考察した。

（1）日本人学生と留学生で、それぞれ初対面の接触場面におけるスタイルの選択に違いがあるか。

調査で設定した初対面の接触場面では、すべての参加者が丁寧体で会話をはじめたが、そのスタイルの選択をそのまま維持する話者と、再選択する話者に分かれた。丁寧体使用の割合は、日本人学生と留学生のどちらにも高い話者と低い話者がいることが確認され、スタイルの選択に関して

は、両者の間に大きな差は認められなかった。

(2) 日本人学生と留学生のスタイルの選択およびシフトが、会話参加者間の社会的・心理的距離についての認識とどのよう関連しているか。

スタイルシフトは、日本人学生だけでなく留学生の発話にも確認されたが、方略的に対人関係を調整する機能については、前者の発話にしか確認されなかった。また、一部の日本人学生による丁寧体から、および丁寧体へのスタイルシフトは、相手との社会的・心理的距離についての認識の変化と連動しており、両者の間には相互関係が認められた。

(3) 日本人学生と留学生のスタイルシフトを分析することによって、どのような教育的示唆を導き出せるか。

分析の結果、スタイルシフトは、進行する会話で相手との社会的・心理的距離を調整・表出する言語行動として、必ずしも日本人学生と留学生との多文化間コミュニケーションにおいて共有されない可能性を示した。例3での日本人学生 L1（b）と留学生 L2（D）の会話のように、話者間で丁寧体を使用しないという言語行動の意味について合意がないまま、互いに反対のスタイルを維持するコミュニケーションは、その最たる例である。本研究の考察に基づき、教育的示唆と今後取り組むべき課題を以下に提示する。

留学生にとって、社会文化的なウチとソトの概念は、敬語習得が困難な要因とも指摘されるが、とりわけ丁寧体の有する対人関係の機能は友好的な人間関係を築くコミュニケーションの重要な鍵である。スタイルシフトのはたらきを Brown and Levinson（1987）の提唱するポライトネスの観点から、親密さを高めるためのストラテジーとして特徴づけ、さらにそれを明示的に教授する方法論の開発は、留学生のコミュニケーション能力育成を推進するのに有効である。また、日本人学生にとっては、多様な言語・文化的背景を持つ話者との交流の場においては、母語によるコミュニケーションであっても、共通語の視点に立って参加する姿勢を育む学びの機会が大切である。丁寧体についての相互理解を前提とせず、母語話者の社会

文化的規範にとらわれない多文化間コミュニケーションの能力を育成する言語教育の深化を推進していくことが求められる。

注

1）　日本社会のグローバル化は、2020 年 2 月以降新型コロナウイルスの感染拡大によって新たな局面を迎え、出入国在留管理庁の報道発表資料（2021 年 3 月 31 日）によると、2020 年の新規外国人入国者数は 3,581,443 人で、前年比 24,821,066 人（87.4％）減少したとされている。しかし、在留外国人数は 2,887,116 人と前年比 46,021 人（1.6％）の減少にとどまることから、日本における多文化化は定着しつつあると言える。

　言語面でも、在留カードおよび特別永住者証明書上に表記された無国籍を除く 194 の国と地域のうちの上位は、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジル、ネパール、インドネシア、台湾であり、アジア出身の在留外国人数が多いことから英語をはじめとする諸外国語だけでなく、日本語を共通語とした接触場面も多くなっていることが推測される。

謝辞

本研究は神田外語大学研究助成・公募研究 B（研究課題：「A case study on Japanese linguistic politeness: Style-shifting in intercultural interaction between Japanese and international students」）の助成を受けた成果である。

参考文献

生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『言語』12 巻、12 号 大修館書店、77–84 頁

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『學苑』662、27–42 頁

ファン・サウクエン（1999）「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2 巻、1 号、37–48 頁

三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版

Brown, P. and Levinson, S.（1987）*Universals in Language Use: Politeness Phenomena*. Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, R. and Gilman, A.（1972）The Pronouns of Solidarity and Power.　In Giglioli, P.（ed.）, *Language and Social Context*,（pp.252–282）. Harmondsworth: Penguin.

Irvine, J.（1979）Formality and Informality in Communicative Events. *American Anthropologist* 81,（pp.773–790）.

Kitamura, K.（2016）Some Theoretical Considerations for Studying Linguistic Politeness in Japanese. *Global Communication Studies*. 4,（pp.197–215）.

Maynard, S.（1991）Pragmatics of discourse modality: A case of da and desu/ masu forms in Japanese. *Journal of Pragmatics,* 15,（pp.551–582）.

Tsujimura, N.（1996）*An Introduction to Japanese Linguistics*. Massachusetts: Blackwell Publishers.

Usami, M.（2002）*Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hitsuji Syobo.

出入国在留管理庁（2021）2021 年 3 月 31 日発表（2021 年 4 月 1 日閲覧）
「令和 2 年における外国人入国者数及び日本人出国者数等について」
「令和 2 年末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/press2021.html/